

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ

平成 7 年 3 月

島根県匹見町教育委員会

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅷ

平成 7 年 3 月

島根県匹見町教育委員会

序 文

本書は、平成6年度国庫補助事業として行った匹見町内の詳細分布調査報告書であります。当報告書は回を重ね、本年度で既に7冊めを刊行することになりました。木町では、圃場整備事業に伴って、こうした地下に眠る埋蔵文化財分門におきましても、事前に調査を行うとともに、積極的に保護すべきは保護し、また啓蒙すべきは啓蒙していく、といった前向きの姿勢で取り組んでいく所存であります。ややもすると、こうした“文化”と名付くものは精神的分野のものとして、経済性と秤にかけられた場合軽くみられがちとなり、見逃されやすいものであります。しかし、交通事故・公害・青少年非行・住宅難といった様々な社会病理現象を生んだ至上経済志向の昨今、今こそ人間の眞の豊かさは何かを問い合わせねばならない好機であります。そういう意味からも、こうした先人の“生きた証”を紐解き、また英知を役立てて未来を見詰めていかなければならぬと考えるとともに、将来に遺していくことが我々に課せられた責務であります。

本報告では、道川地区におきまして4地点を調査し、そのうち田中ノ尻地点で縄文時代前期のものが遺物とともに遺構が検出されたようあります。詳細については本格調査を待たなければなりませんが、ただ該当期に人が営むことのできる豊かな環境であったことを物語っていることは確かで、そういうことを知る上からも、今回の発見は貴重であったといわなければなりません。

発掘調査に際しましては、土地所有者の方々は勿論、地元の皆様方に多大なご支援をいただきとともに、圃場整備事業関係者にもご協力を賜わり、ここに記してお礼を申し上げる次第であります。また、ご指導ご教示下さいました県教育委員会の文化課一同の皆さん、島根大学の田中義昭先生、広島大学の河瀬正利先生、山口大学の中村友博先生本当にありがとうございました。

今後とも、こうしたご支援を無にすることなく、文化財保護あるいは活用に活していきたいと存じておりますので、一層のご協力を賜りますよう念じてやみません。

平成7年3月5日

匹見町教育委員会

教育長 斎 藤 惟 人

例　　言

1. 本書は、平成6年度国庫補助事業として、匹見町教育委員会が行った町内遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査は、島根県教育委員会文化課の指導を得て、次のような体制で実施した。

調査指導　島根県教育委員会文化課

　　島根大学法文学部教授　　田中 義昭

　　広島大学文学部教授　　河瀬 正利

　　山口大学人文部教授　　中村 友博

事務局　匹見町教育委員会教育長

　　斎藤 惟人

　　匹見町教育委員会次長　　渡辺 隆

　　匹見町教育委員会社会教育主事　　河野 敏幸

　　匹見町教育委員会文化財保護専門員　　渡辺友千代

調査補助員

　　和田 詩子

調査参加者　栗田 定　森脇 雅夫　渡辺 照　岡本 弘

　　斎藤 直行　長谷川時子　山崎リマヨ　溝田 久子

　　大谷 孝子　塙道宮美枝　清寺智恵子

3. 発掘調査に際しては土地所有者をはじめとして、地元の方々に終始多大な協力をいただくとともに、また圃場整備事業担当者にもご援助いただいた。ここに感謝の意を表したい。
4. 本書に掲載した配置図は縮尺1/1000のもので、匹見上地改良区のご協力を得、また調査地点図は縮尺1/25000を使用したものである。なお標高測量はワールド航測コンサルタント株式会社の協力を得た。
5. 編集にあたっては、大賀幸恵・和田詩子・青木美和氏らのご協力を得て、執筆・編集は渡辺友千代が行ったものである。

目 次

第1章 地 域 観 概	(渡辺友千代)	1
第1節 地形的立地		1
第2節 地 域 環 境		1
第3節 歴 史 的 環 境		3
第2章 調査の経緯と調査方法	(渡辺友千代)	4
第1節 調査の経緯		4
第2節 調 査 方 法		4
第3章 各地点の調査概要	(渡辺友千代)	7
第1節 田中ノ尻地点		7
1. 調査地点の位置と地形的立地		7
2. 調査の概要		7
3. 出上 遺 物		11
第2節 大町 地 点		13
1. 調査地点の位置と地形的立地		13
2. 調査の概要		15
第3節 山根 地 点		18
1. 調査地点の位置と地形的立地		18
2. 調査の概要		18
第4節 蔽 町 地 点		19
1. 調査地点の位置と地形的立地		19
2. 調査の概要		19

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 調査地点図	4
第3図 調査区配置図	5
第4図 上層図(西壁)	8
第5図 上層図(北壁)	9
第6図 集石遺構図	10
第7図 遺物投影図(西壁)	11
第8図 遺物投影図(北壁)	12
第9図 土器実測図	13
第10図 石器実測図	13
第11図 調査区配置図	14
第12図 上層図	16
第13図 調査区配置図	17
第14図 上層図(東壁)	19
第15図 調査区配置図	20
第16図 土層図(東壁)	21

図 版 目 次

図版1 1. 発掘地点近影(南西から)	2. 層序状況(南から)
図版2 1. 西壁・北壁の層序状況	2. 南からみた集石遺構(北から)
図版3 1. 実測遺物(背面)	2. 実測遺物(裏面)
図版4 1. 発掘地点遠影(南東から)	2. A区北壁
図版5 1. B区北壁	2. 発掘地点近影(東から)

第1章 地域観概

第1節 地形的立地

本地域は、北東一南西方向に走る中国脊梁山地の北西側に位置する。匹見川源流は、広島県境内にあって、その脊梁山地に沿って北東から南西へと支流赤谷川などを集め、匹見の中央部へと流下している。該地域はその流下地に括がっており、四周は標高たる1000m内外の山地に覆われているのである。

また、岩類は流紋岩・斑岩および花崗岩からなり、中生代の白亜紀に形成されたものといわれ、脊梁山地と同じように北東・南西方向に走って断層谷をつくっている。標高は400~1100m台に立地しているため、年間平均気温は12°Cと低く、降水量も2250mmと多く、また多雪地帯である。したがって、林相は温帯林のナラ林を主体とするが、岩倉山(1022m)・高岳(1054m)などの高位な山地には冷温帯林のブナ帯が分布している。しかし、匹見川や支流域の低位地では、暖温帯常緑樹であるウラジロガシなどの群生が見られるのである。

また動物においては、河には鮭鰈科のゴギ・ヤマメ・アマゴなどが生息し、たまにオオサンショウウオも見られる。そして、山地には中形動物としてのツキノワグマやイノシシもあり、山くはシカも多く生息していたらしい。小形動物のキツネ・タヌキ・アナグマ・ノウサギなどは無論のことであるが、このように動物たちが繁茂している背景には、実をつける堅果類の落葉広葉樹帯が広がり豊かな自然が遺されているということであろう。



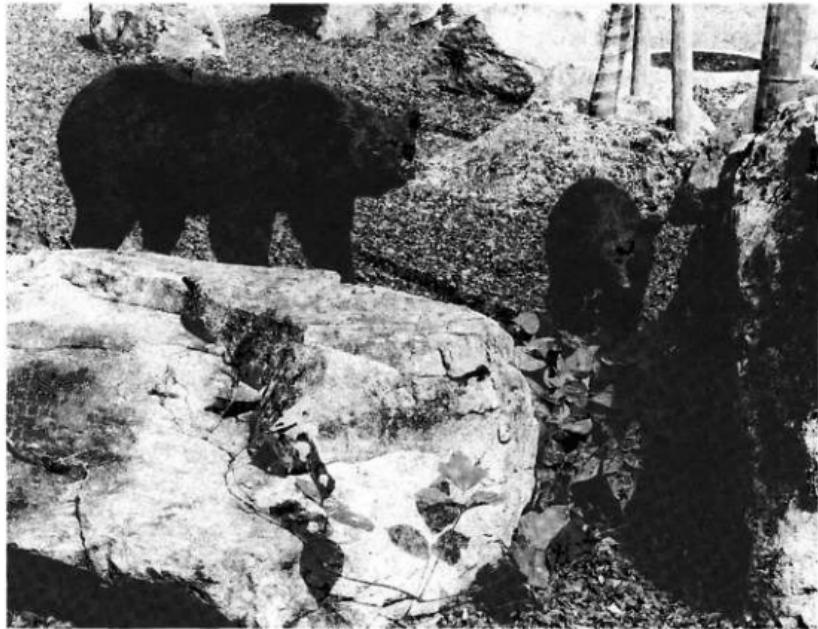
第1図 遺跡位置図

第2節 地域環境

該地域の道川は、藩制期には道川・下道川の2村から成っていたが、明治7年には統合され、道川村と称して浜田県に属していた。昭和30年には匹見村・匹見下村との3村合併により匹見村に統合され、翌年町制施行によって匹見町となり、現在では大字単位地名となっている。

山間立地のため、古くから“山”との付き合いが濃かったようである。『石見八重草』の上道川の項に「農事 梱木地をひき 紙を漉き 山獺を仕る」とあり、また下道川の項には「木地を挽 山獺 炭を焼」とあって、その生業が山地に向けられていたことをよく物語っている。また信仰においては、水神としての河内神が本地域ではもっとも多く分布しているが、山に鎮まる祖靈供体の大元神も4例みられるとともに、日本谷には山神も存在していたらしい『石見国神社私記』。

また広島県に接しているため、古くから芸北（広島県西北部）地域との交流は盛んであった。例えば、栗栖・河野・竹田（武田）などの姓氏は、山陽方面からの越境して上着したものであり、西見地域に多い寺戸姓などは最たるものであった。また通婚圈域でもあったため、方言やアクセントにも多くの類似性が見られるとともに、生活の立て方にもその影響がみられる。とくに藩制期には、盛んであった当地のタタラ技術も搬入され（加計の佐々木氏など）、豊富な森林が活かされる一方、木地師などの活動の場でもあったのである。しかし昭和30年代に入ると林業や製炭業の斜陽化とともに、1000人台を越えていた人口も現在では戸数82、人口は230と減少し、典型的な過疎地域となってしまったのである。



西中国山地に生息するツキノワグマ

第3節 歴史的環境

永きわたって開発が行われなかつたためと思われるが、原始古代は余りわかっていない。しかし、今回分布調査を実施した山合原地区には、先土器時代から縄文時代前期に至る県史跡の新柳原遺跡が存在している（第2図）。また下道川地区には縄文時代前期のダヤ前遺跡、あるいは町指定の上家屋（うえなや）遺跡の縄文時代後期のものや、縄文時代後期の配石遺構が検出された前田中遺跡などが分布している。

また中世遺跡としては、下道川地区の丘陵地に小丸山・道川・次郎と呼称する山城があり、近世期の製鉄（タタラ）遺跡は、上流部の上道川地区を中心に36箇所を数えて特に多い。

（渡辺友千代）

第2章 調査の経緯と調査方法

第1節 調査の経緯

道川地域の県営圃場整備事業に伴って、詳細分布調査報告書は2号めであるが、匹見地域から通算すると7号目となった。

今回は、本地域の中心部である出合原地区が平成7年度から事業が始められるため、それに先立ち該当地区を詳細分布調査を行ったものである。

調査地点は、平成6年11



第2図 調査地点図

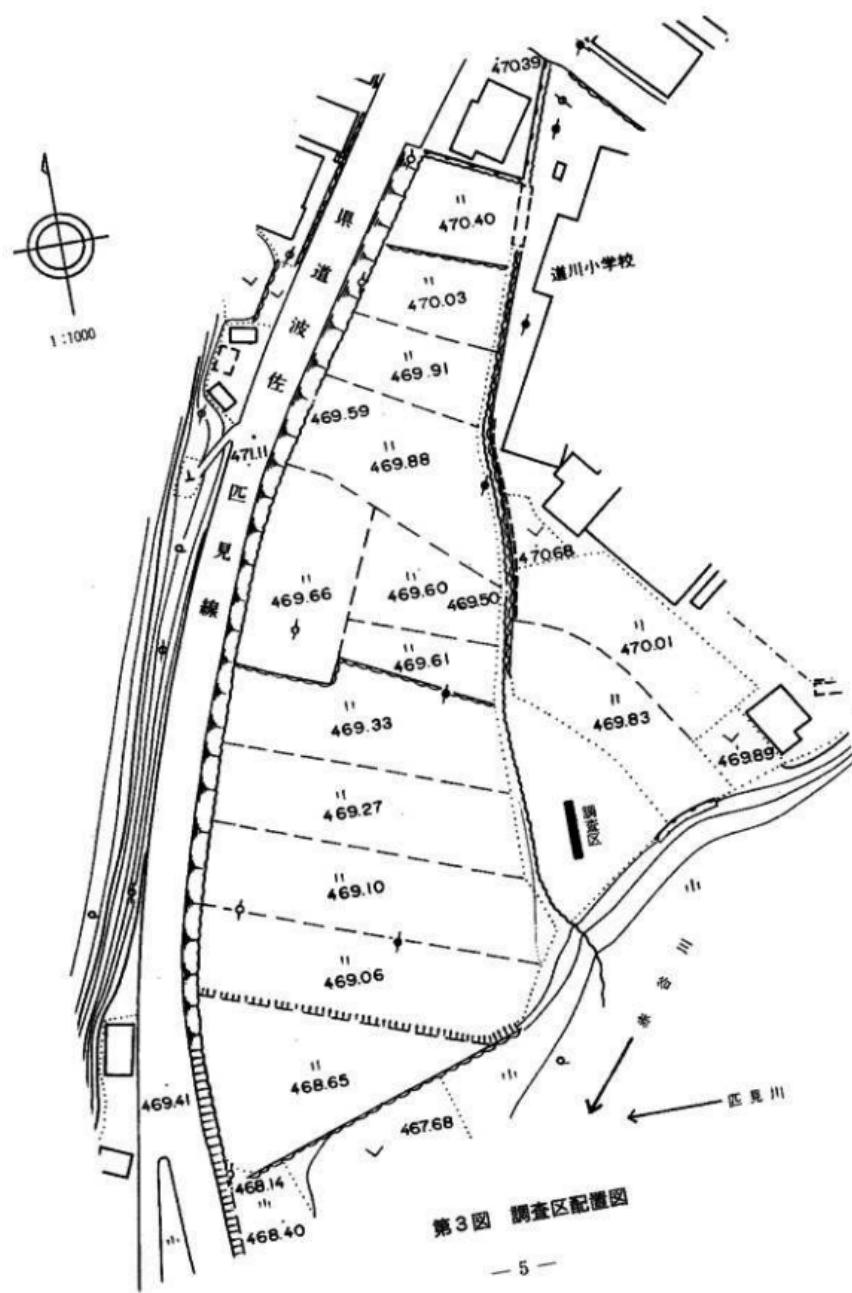
月7日に山口大学の中村友博教授とともに立地状況からみて本地區のうちの4地点を選定した(第2図)。

現地調査は、平成6年12月5日から同年の12月22日までのうちの11日間、98人役を費して実施した。これらの4地点を調査した結果、田中ノ尻地点で遺物・遺構包含層が確認されたが、他の3地点では認められなかった。なお、今回の調査では遺物・遺構の検出有無にかかわらず、全て発掘場所を小字名をもって呼称することとし、尾語に地点を添付することとした。

第2節 調査方法

調査区の設定については、いずれの4地点とも区形あるいは地点とも任意に行ったものである。また、設定方向は磁北を基準とし、遺物・遺構包含層が検出された場合、拡張あるいは本格調査などに支障なきよう配慮しながら設定したつもりである。

発掘は狭小ということもあって、別にトレンチなどは設けることはなく、上面から順に層序を確



認しつつ平面的に掘削して行った。とくに後世の人為層と想定される耕作上としての表土、あるいは水田の床土と捉えられる客土までは、遺物が出土したとしても実測はせず、層名のみを確認する程度とした。しかし、それ以下は垂直分布・平面分布とも全て実測して取り上げた。

(渡辺友千代)

第3章 各地点の調査概要

第1節 田中ノ尻地点

1. 調査地点の位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡匹見町大字道川イ33番地に所在し、そこは北東流した匹見川本流と、北西流した赤谷川が比高差約12mを測った相会地に位置している（第2図・第3図）。谷間に存在しているとはいえ、そこは2川の相会地であるため狭小な谷平地が形成されており、河岸段丘も発達している。こうした3方に開口した要衝の地形的立地のため、本地域の中心的役割を果たしているとみえ、本地区には役場支所、小学校あるいは郵便局・農協といった諸機関があるとともに商店や民家も点在している（図版1-1）。

調査地点は小字名を田中ノ尻と呼ばれ、支流赤谷川の河岸端にあって、現地標高469.69mを測る。匹見川本流は、調査地点の100m南側で赤谷川と合流しており、地点の西側の対岸には先土器時代から縄文時代前期にかけての県史跡である新樹原遺跡があって、その山裾側を国道191号線が貫道している。国道は、北東に向かっては匹見川本流に沿って広島県へと至り、一方西側へは赤谷川に沿い、そして日本海側の益田市へと通じている。

2. 調査の概要

調査区の設定 調査地点は、北東-南西方向に700m、北西-南東方向に最大で150mを測る河岸段丘が形成されている南西端に設けることにした。本地点は水田で、すぐ南東面は段丘端となっていて、そこを匹見川と赤谷川とが合流し、比高約12mを測って深く落ち込んでいる。また山裾側の西側は、約100mを測って狭く、やはり水田となっているが、本地点より50~60cm低くなっている湿地と化している（第3図・図版1-1）。

調査区は、現地表面標高約469.69mを測る調査対象地点の南西側に任意に設けることにした。それは立地的に北東側に遺跡の可能性があることからまず南西面を押さえておこう、ということからであった。調査区は磁北方向を基準に、長さ10m、幅1mのものを設定した（第3図）。

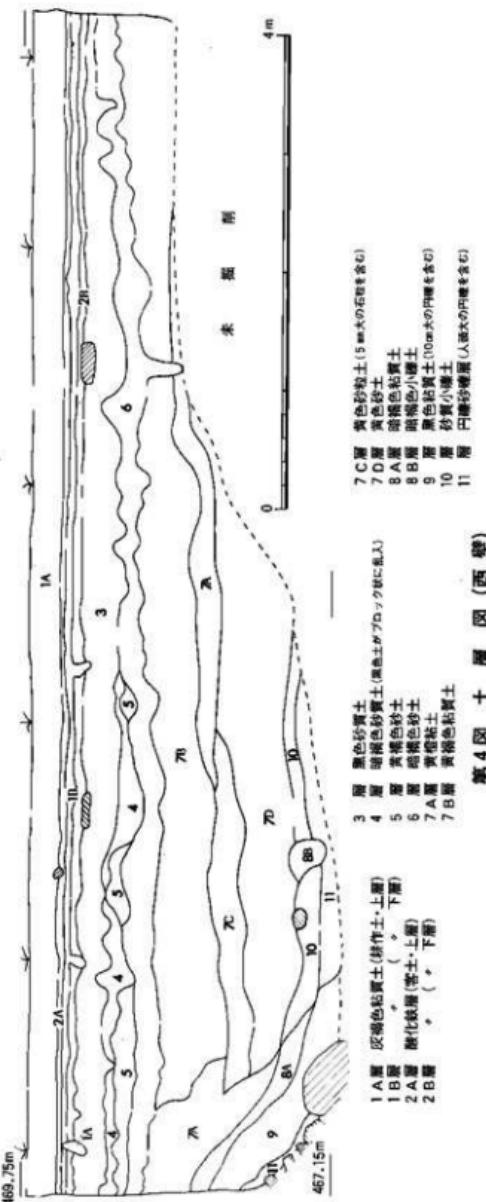
層序と層位 基本的層序は、1層の水田耕作土、2層の酸化鉄層、3層の黒色土、4層の暗褐色土、5層の黄褐色土、6層の暗褐色土、7層の黄橙色粘土、8層の暗褐色土、9層の黒色土、10層の砂礫層の順に堆積している。

ただ、1~6層までは4周の層序とも一致していることから領けられたが、7層以下は、不一致が認められることから確かとはいえない。東・西壁をみると（第4図・図版1-2），部分的に断

絶されたように特に異質の砂土が嵌入しているのである。4周する層序関係からみると、これはおそらく対川する匹見川の貴流がもたらした痕跡、として捉えた方がよさそうである。それは既堆積していたであろう7A層の粘土層、あるいは8A層とした黒色土層などに嵌入、または流去して砂土層へ入替っていることから看取できようである。

1層とした表土の水田耕作土は、層厚約27cmを測って、ほぼ水平に堆積する。しかし色調、土質とも同質な層位が酸化鉄の含浸した下位層（1B層としたもの）にもみられたが、分層しているものの表土の耕作上と同質なものと判断される。その層位（1B層）は、約5cmを測って薄層であるが、おそらく表土（1A層）の耕作土より以前に堆積していたものと認められる。

2層としたものは、酸化鉄が含浸した層位である。本層も分層しており、つまり分層する2つの耕作上の下位に形成されている。層厚は上位が4～7cmを測って薄く、下位は5～10cmを測ってやや厚い。この下位の酸化鉄層から1点の鉄滓が出土している。3層は、黒色の砂質土である。層厚は7～32cmを測って南側（下流方向）が薄い。土質は砂土で

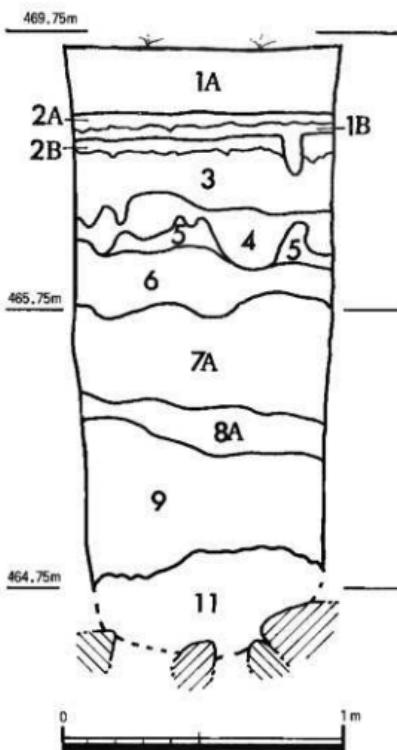


形成され、人為以外の石もみられなかった。遺物としては、本層の中位面以上に石器剝片22点（うち1点は黒耀石）、土器片5点、炭化物1点が出土し、また遺構としては河原石を用いて平坦に並べられた集石（第6図・図版2-2）も検出されている。

4層は暗褐色砂質土で、上位層の黒色土の漸移層とみられる。そのため含浸差があつて、厚薄差がはげしく、また部分的に黒色土がブロック状に嵌入する。本層には遺物・遺構とも皆無であった。5層は黄褐色砂土である。本層は上流の北側には漸次的にみられたが、南側では河流によって流失したものなのか確認できなかった。6層は、暗褐色砂土層である。層厚は10~30cmを測って比較的安定して堆積し、礫や石もほとんどみられない。

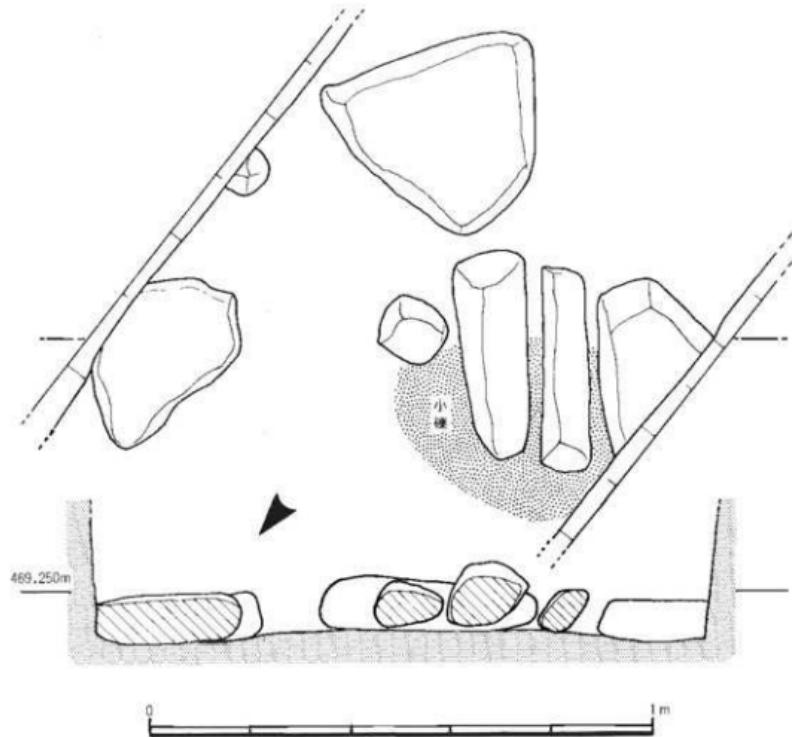
7層は黄色系の層位。土質的に粘土系と砂土とに分離しているが、本来は北側（上流側）の粘土質の層位が形成されていたものと、層序関係から想定される。おそらく砂土系のものは、対川する匹見川が貫流して堆積した層位とみられるのである。次層の8層は、暗褐色粘質土層である。やはり本層も匹見川の河流によって裂破されたらしく、北側に一部しか存在していない。砂礫層で残る8A層とした層位が、その成因状況をよく物語っているといえそうだ。

9層は、粘質系の黒色土。北面に一部しか確認されていないが、対岸の新横原遺跡でいう第7層の暗褐色砂層に当たるものであろう。層厚は20~37cmを測って、急激に陥り込んで砂礫によって消除されているが、匹見川などによる貫流がなかった場合、本層は比較的安定して堆積していたものと想定したもの想像される。また、出土遺物としては実測はしていないものの、数点の炭化物が確認されることから文化層の可能性も残されている。なお、その下位層は小礫などの基盤層であった。



第5図 土層図(北壁)

集石遺構 本構は、3層黒色土層の中位面上に検出された。(第6図・図版2-2)。石は径15~40cmを測る平坦な河原石6個を用いそれらのうち2石には人為で割られたと想定される裂痕が見られた。その下面標高約469.12m、上面標高約469.28mを測ってほぼ平坦に据えられていたが、黒色上



第6図 集石遺構図

の單一層内ということもあって、土坑などは検出できなかった。しかし、3石が並列した箇所には5~10cmを測る円錐が充填し、それらは火焼のためか茶褐色を呈し、多くは裂割する。これらの焼石から、火に覆わる炉的な機能のものであったのではないかと想像されるが、炭化物が検出されていないこと、また全体的な状況判断できていない現状では確かなことはいえない。この周辺からは、上器片や石器剥片など数点が出上している。

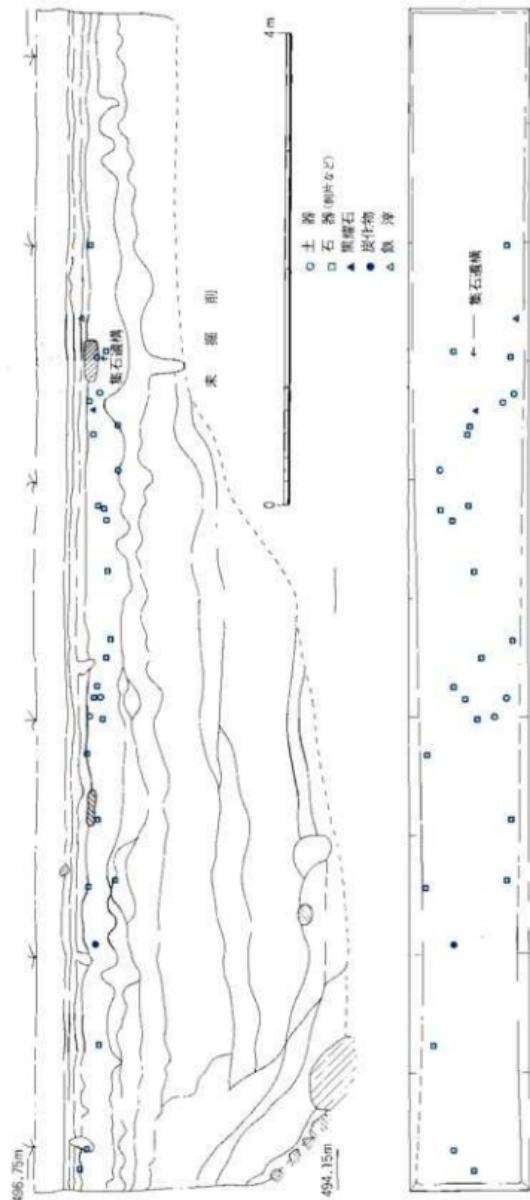
3. 出土遺物

はじめに 本地点からは石器剝片21点、土器片5点、黒曜石1点、炭化物1点、鉄滓1点の計29点の遺物が出土している。このうち鉄滓は2B層とした、つまり下位の酸化鉄層から出土したもので、これ以外の18点は、すべて3層とした黒色砂質土上に出土したものである。また、このほか実測はしていないが、9層の黒色粘質土から3点の炭化物が出土している。したがって3点を加えると、本地点からの出土遺物は32点ということになる。

以下、これらのうち土器片3点と、削器・石匙・石鎌や剝片などの石器9点を実測することにした。

実測土器（第9図・図版3）

1は、轟B式土器の口縁部。内外とも条痕で調整し、外面の口縁端に3本のミズバレ隆起帯をもつ。隆起帯は貼り付けられて撫であげられたらしく、その断面は三角形を呈し、隆起帯の間に施文具痕が顯著である。内外面とも橙褐色を呈し、外面には、煤が付着する。器内は比較的薄く、胎土器に3mm大の石英



第7図 遺物投影図(西壁)

が混入、焼成はきわめて堅緻である。

2は、轟B式上器の口縁端部で外面部に施文具による撫あげて2本の隆起帯をつくる。端部には微痕の刻目が僅かにみられる。内外とも橙褐色を呈し、外面に煤が付着する。焼成は堅緻で、胎上は精緻である。外面に縱方向の彫文を施し、内面は条痕文で調整する。色調は橙褐～茶褐色を呈し、胎上は精緻である。

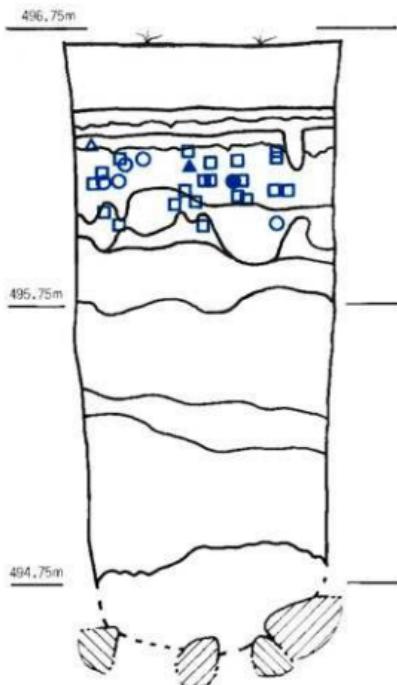
実測石器（第10図・図版3）1は、玄武岩質の削器。現存器高8.7cm、最大器幅6.5cm、重さ88gのものである。右半に楔形打裂による弧状刃部分面があり、僅かな不調整部分を2次的に細部調整する。左辺の背部、また上辺は粗形に調整する。2は、折損した横形石匙。石材は玄武岩で、刃部・背部の一端が折損する。背面の刃部面は急斜度に細部調整するが、裏面は浅形に調整。つまみ部分は長形を呈し、2次的な細部加工はみられない。3は、安山岩質の鍔形の石鎌。現存器高2.3cmを測り、右辺の脚部は折損する。

4は、黒色をした黒耀石の剥片。5は、上部が折損した削器。石材は安山岩で、片面（背面）を細部調整したもの。6は、楔形石器で、石材は安山岩。器高3.3cm、最大器幅1.8cmを測って、重さ3g。7・8とも石器剥片で2次的な調整は皆無。9は、安山岩質の石鎌と想定されるもの。軸部の断面は三角形を呈し、背・裏面の側縁を部分的に剥離を施す。おそらく尖基鎌であろう。

（渡辺友千代）

注

1. 『新横原遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会 昭和62年2月



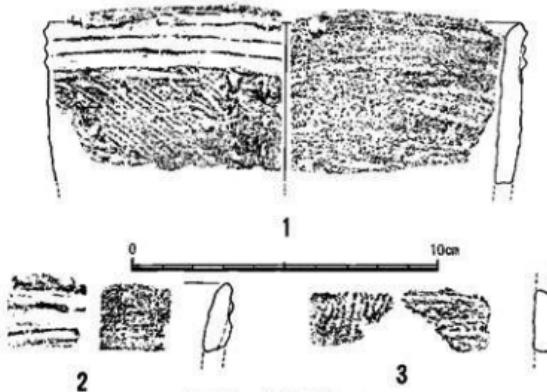
第8図 遺物投影図(北壁)

第2節 大町地点

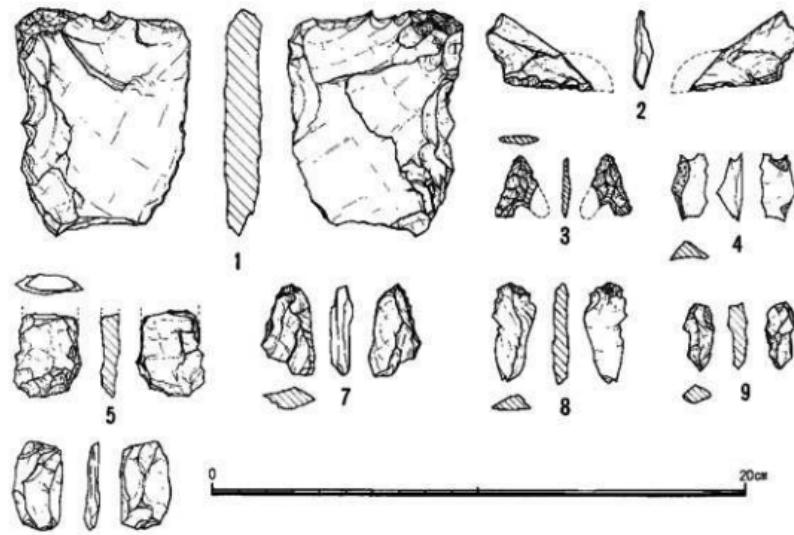
1. 調査地点の位置と地形的立地

本地点は、島根県美濃郡匹見町大字道川イ81番地に所在する。本地區の字名は出合原と称され、地名の如く匹見川とが相会し、そこは原が形成されている（第2図）。

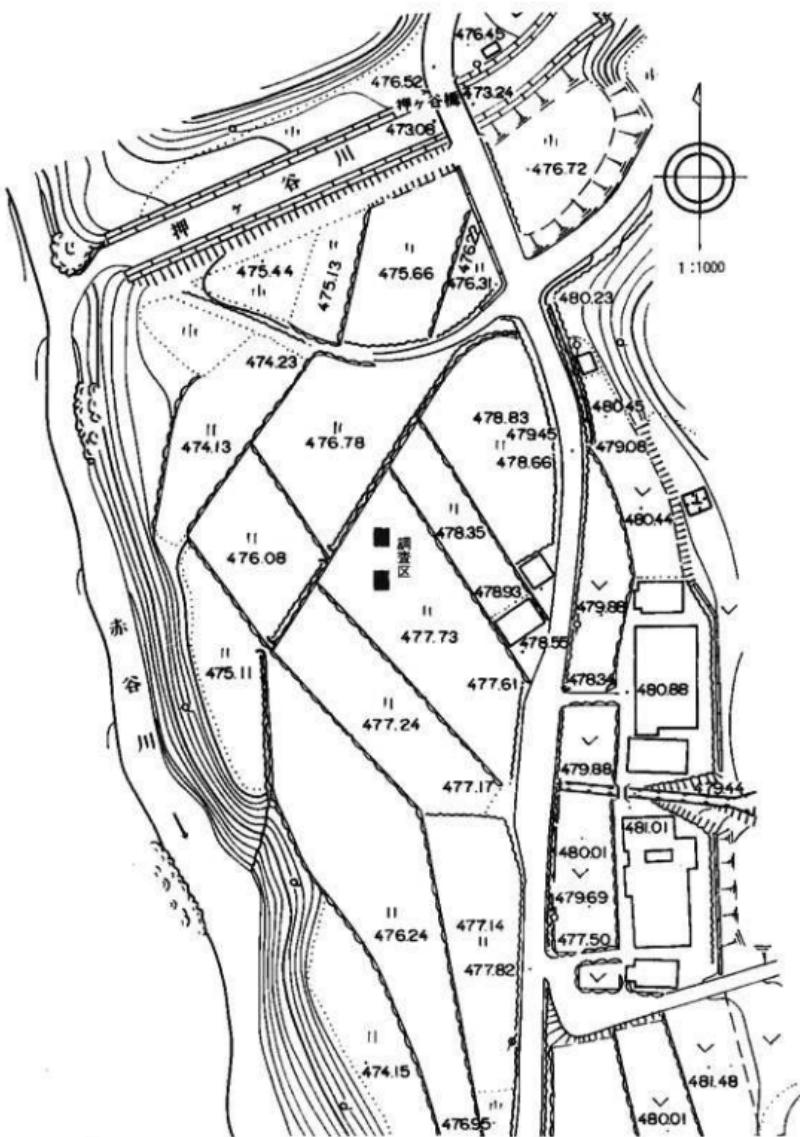
赤谷川の左岸に立地する本地点は、北面を押ヶ谷から南西流する押ヶ谷川が赤谷川に合流して仕切り、ま



第9図 土器実測図



第10図 石器実測図



第11図 調査区配置図

た南側に向かっては東面の背戸山(698m)の山裾がせまっていて、段丘面は尖滅しているといった小範囲の河岸段丘にある(第11図・図版4-1)。この段丘面は、緩斜度に南々東流する赤谷川へ派生し、そこは水田として拓かれている。

2. 調査の概要

調査区の設定 調査区は、河岸段丘面のほぼ中央部にあたる水田に設けることにした(第11図・図版4-1)。その地点は小字名を大町(おおまち)といい、表面標高477.45mあって、押ヶ谷川とは約4m、赤谷川とは約10mの比高を測る。

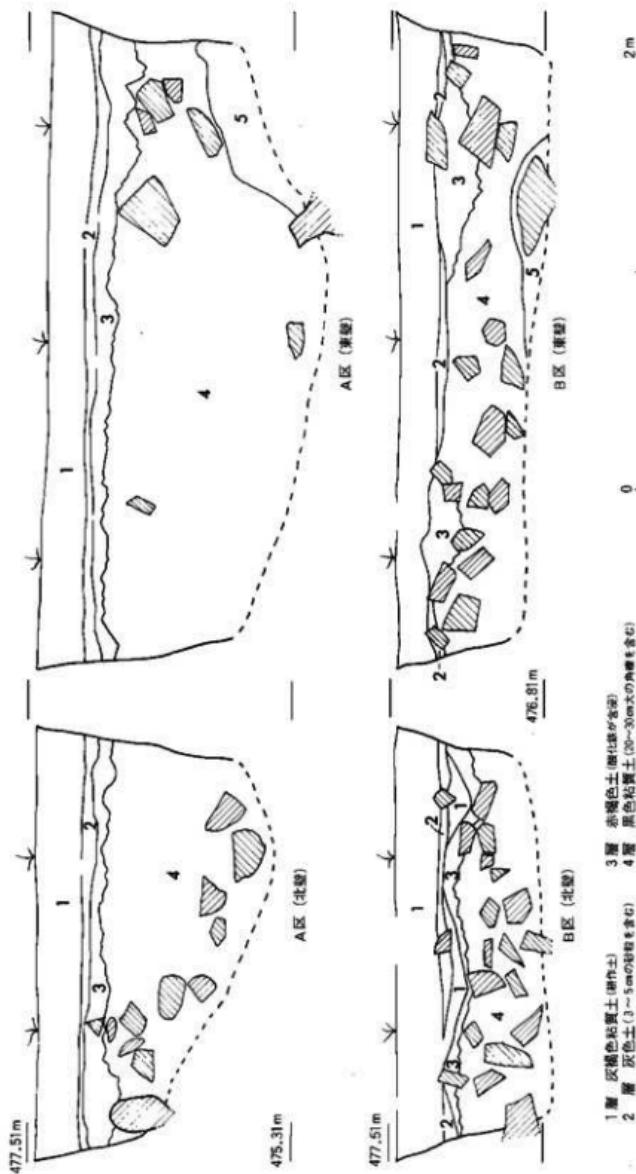
調査区は同地点に任意に、まず磁北方向に3m、幅2mのものを設けた。そして、もう1箇所は同調査区から磁北へ5m測った地点に、3m×2mを設けたのである。したがって、調査面積は6m²+6m²=12m²とした。また地区名は、前者の南側のものをA区と称し、後者の北側のものをB区とした(第11図)。

層序と層位 (第12図) 本地点の基本的層序は、1層の水田耕作土(灰褐色粘質土)、2層の客土(灰色土)、3層の赤褐色土、4層の黒色粘質土、5層の黄褐色砂礫層の順で両調査区とも同様に堆積する(第12図・図版4-2・5-1)。

まずA調査区であるが、その1層は灰褐色粘質土の水田耕作土である。層厚は25~33cmを測って比較的厚い堆積。2層は、石粒を含んだ灰色土の客土で、層厚は2~10cmを測って、ほぼ平坦に堆積する。3層は、酸化鉄が含浸した赤褐色土であった。層厚は19~30cmを測り、酸化鉄分の含浸からくる層薄差がみられた。これは、おそらく上質の硬軟差によって生じたものと思われる。本層には山石である10mm前後の角礫がみられたが、下位層のものより小さく、また少なかった。4層は、粘質性の黒色土である。A調査区の層位をみるとかぎり、層厚は30~140cmを測って薄差がはげしい。本層には20~30cmを測る角礫を多く含んでいることから、また立地的(河岸段丘)にみても違和感があり、東側の背戸山の崩壊土ではないかと思われた。それを裏付けられるかのように、とくに角礫が密集する部分には空隙もみられたのである。5層は、基盤層の円礫層であった。

以上、A調査区をみてきたが、いずれの層位でも遺物あるいは遺構とも検出されなかった。B調査区は、A調査区から5mを測って北側に設けたもので、層序・層位ともA調査区とあまり変わらない。その1層は水田耕作土で、20~30cmを測る。伏流水のためか、粘付く。2層は、2~3mmの大砂礫を含んだ灰色土の客土である。下位層の充填する角礫のためか、尖滅あるいは消去した部分もみられた。3層は酸化鉄分が含浸した赤褐色土。色調的に分層しているが、土質的には下位層の4層と同類のもので、やや砂性とくに砂礫的と感じられる部分に含浸しているように思われた。

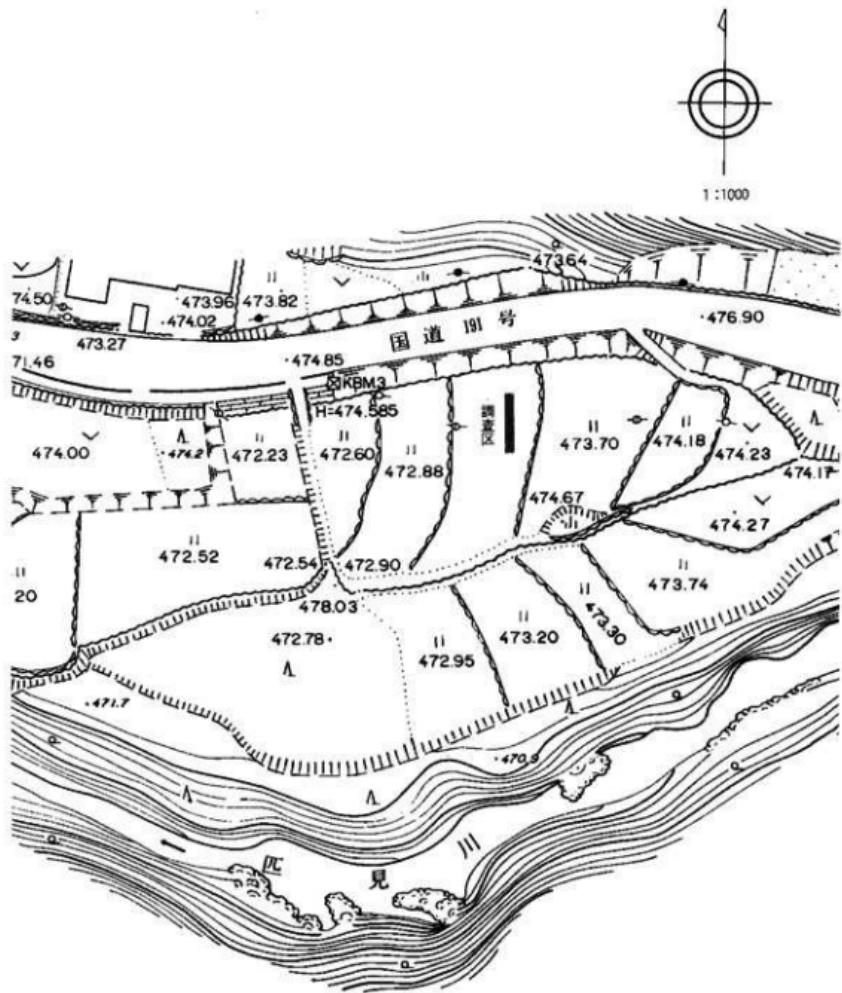
次層の4層は黒色粘質土であるが、A調査区に比べると山石である角礫も多く含んでいた。その山石は径20~50cm大のもので、河原石などの円礫は見あたらなかった。層厚は30~60cmを測り、A



第12図 土層図

- 1層 反覆色粘土(砂質)
- 2層 灰色土(3~5mmの岩片を含む)
- 3層 赤褐色土(4~10mmの岩片を含む)
- 4層 黒色粘質土(20~30mmの岩片を含む)
- 5層 黄褐色砂質土(人頭大の岩塊を含む)

調査区と比べて下位層との層界は比較的安定しているように捉えられた。なお木層は、有機質土または角礫の充填という状況からみて、山土の崩土の堆積とみられる。



第13図 調査区配置図

以上、いずれの層位とも人為的な遺物あるいは遺構と判断されるものは検出されなかった。

第3節 山根地點

1. 調査地点の位置と地形的立地

本地区は、島根県美濃郡匹見町大字道川イ148-2番地に所在する。字名は新横上切山根（しんまきかみのきれやまね）といわれるが、調査地点名としては本字名の末尾をとって「山根地點」とする。同地区は通称新横と呼ばれ、その地名が示すように、2川の相会する本地側には県史跡として指定されている新横原遺跡が存在している。また本地点の字名の初頭語も、それらに関連して名付けられているのである。

本地区は、匹見川と赤谷川とが合流する地点から匹見川に沿い、西方向に700m遡った区域までをいい、そこは匹見川が形成した狭長な河岸段丘が右岸に発達していて、水田地となっている。北面側の山裾には民家があり、そこを国道191号線が北東に向かって広島へ、また北西へは日本海側の益田市へと貫道している（第2図）。

本地点は、匹見川との比高差約9mを測った山際の水田で、現地表面標高約473.21mを測る（第13図・図版5-2）。

2. 調査の概要

調査区の設定 調査区は山寄りの現地表面標高約473.21mを測る調査対象地點に、任意に設けることにした。それは磁北方向にトレンチ状の幅1m、長さ10mのものとした（第13図）。

層序と層位（第14図・図版6-1）本調査区の基本層序は、1層の水田耕作土、2層の客土、3層の茶褐色土、4層の黒色土、5層の灰褐色砂質土、6層の黄褐色砂質土、7層の砂礫層の順で堆積するが、いずれの層位とも遺物・遺構は検出されなかった。

その1層の水田耕作土であるが、灰褐色の粘質土である。層厚は8~20を測って北の山裾側が薄く、河側に向かっては深くなっていた。2層は、灰色砂粒土の客土。下位層に円礫が充填しているためか、堆積状況は凹凸する。層厚は2~10cmを測り、2~3mmの石粒も含んでいた。3層は、酸化鉄が含浸した茶褐色土で、小礫を含み、部分的に20cm大の円礫が露頭する。層厚は、尖滅部分から20cmを測るなど厚薄差がはげしい。色調的に分層しているけれども、土質的には下位層の4層と類似するものと思われる。

4層は、10~40cmを測る石体や円礫も多く含んだ黑色粘質土である。層内には1mを測る石体が、下位層から露頭するものもあり、層厚は尖滅部分から40cmを測り、とくに下位面は乱曲する。これらの層状から、本層は数次の匹見川からオーバーフローがあったらしいことを想像させたのである。

6層は、部分的に堆積した黄褐色砂土である。7層は、基盤層としての砂礫層。

以上みてきたが、本地点の層序は、想像していた以上に、安定した堆積状況ではなかった。表十の耕作土を掘削すると、いきおい河床疊といった状態であった。数次における匹見川の貢流があったものと想定される。

第4節 薮町地点

1. 調査地点の位置と地形的立地

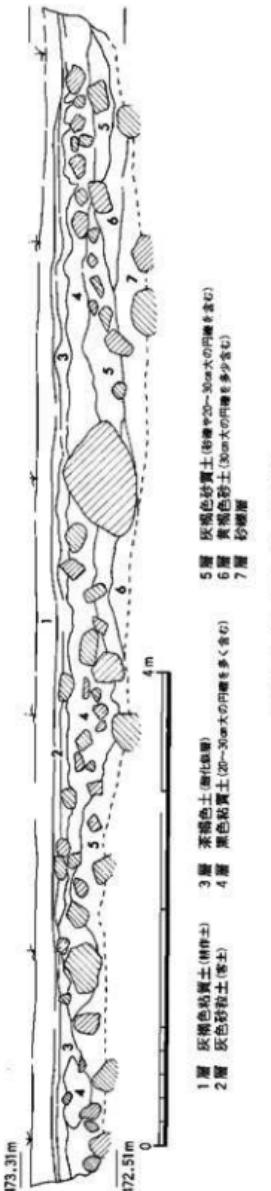
本地点は、島根県美濃郡匹見町大字道川イ173番地に所存する。該当地は元組地区といわれ、顯著な北東—南西方向に走る臼木谷断層谷に拓けた集落である。この断層谷に沿う匹見川は、左右に狭長な河岸段丘を形成しながら南西流して、右支の赤谷川と相会して匹見の中央部へと流下している(第2図)。

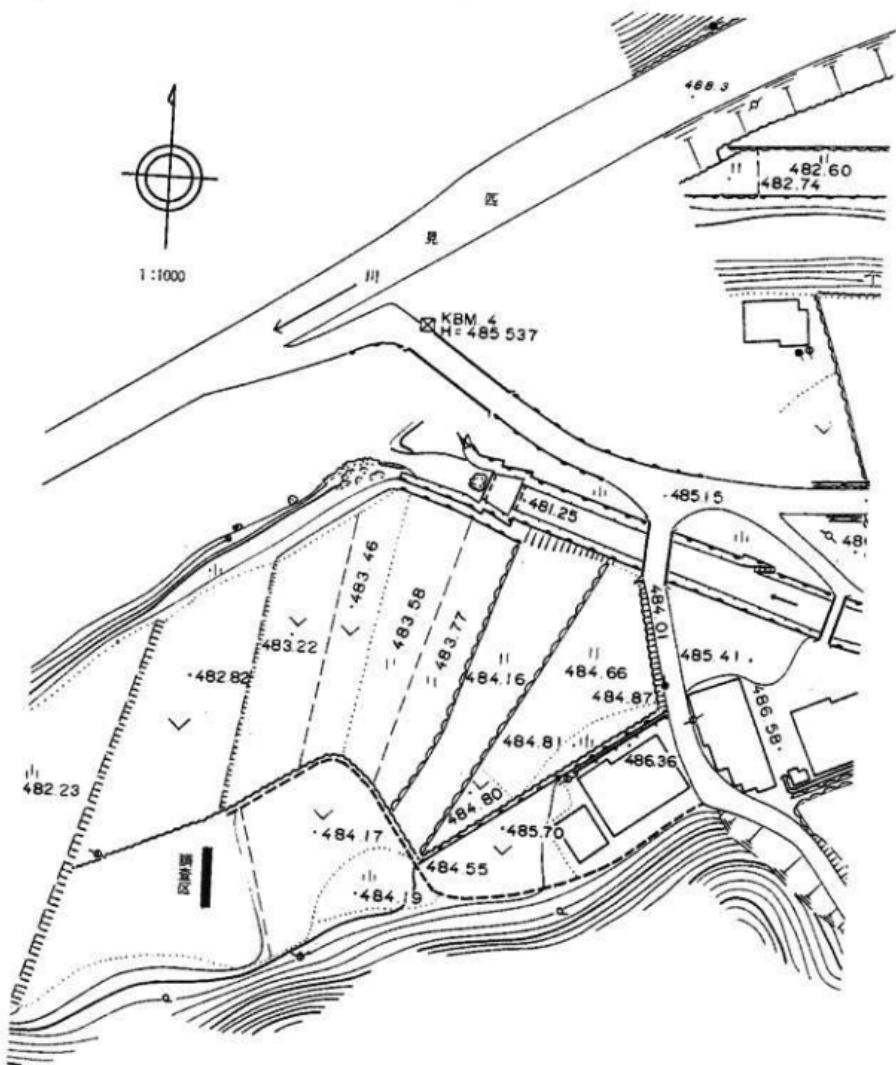
字名を薮町(やぶまち)という本地点は畑地である。もとは水田であったというが、南面に急峻な山がひかえていたため、日当たりが悪くむかなかつたとみえる。100m北側には比高約6mを測って南西流する匹見川がひかえ、また北東側には二ノ谷川が北西流して匹見川に合流している(第15図・図版6-2)。

現地表面標高約482.85mの圃場本地点周辺は、北面を中心とした3方は水田地が広がっているが、とくに下流方向の北西面は休耕田と化して荒地となっている。その理由は主に日当たりの関係からであろうが、一方で匹見川との比高差が少ないとあって、オーバーフローが度たびあったといい、瘦地という地味ということもあるらしい。

2. 調査の概要

調査区の設定 調査区は、調査対象地に任意に設定することにした。その調査区は、磁北方向に幅1mを測るトレ





第15図 調査区配置図

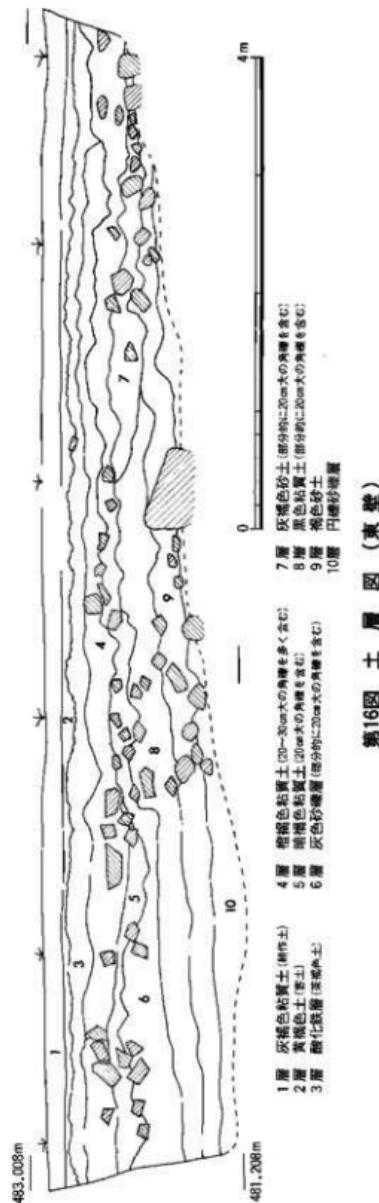
ンチ状のもので、調査面積はしたがって10m²であった（第15図）。

層序と層位 本調査区では人為的な遺物あるいは遺構は、どの層位においても検出していないが、様調査した層序や層位について記述しておこう（第16図）。

その1層は耕作土である。層厚は14~18cmを測って、ほぼ平坦に堆積している。その層状は灰褐色を呈した粘質土で、下位面を中心に疊を含んでいる。2層は、客土と想定される黄褐色土で、層厚2~10cmを測る。3層は、酸化鉄分が含浸した茶褐色土で、層厚は8~28cmを測って厚薄差がはげしい。これは層状によって表出しているらしく、つまり真砂や砂礫状況ほど深く含浸するという傾向がみられる。

4層は、角礫を含んだ橙褐色粘質土である。層厚は、匹見川の北側は尖っているのに対して、山際の南側は厚くて40cmばかりである。本層には10~50cm大の山石や砾を含んでいたが、それらはとくに山麓側の南半に集中していた。5層は、暗褐色粘質土であった。本層の堆積は、南端に僅かみられるにすぎず、匹見川の北側には認められなかつた。これらの4・5層は、堆積状況あるいは層状から考えて山側からの流出堆積したものと捉らえてよかろう。

6層は、灰色砂礫層。層内には20cm大の山石と想定される角礫などを含んでいる。層厚は15~40cmを測り、層界は凹凸する。7層は灰褐色の砂土層である。部分的に20cm大の角石もみられ、西壁をみると限り北半のみ堆積していた。8層は、黒色粘質土で、やはり20cm大の角石を含み、とくに北



半に集中する。本層は、おそらく沢地状に形成された地形に堆積した層位だったものと思われた。ただ、河側にあたる北面がやや上昇しているという成因は、匹見川による貫流等によってもたらされたものと考えられる。

9層は、褐色砂土で、本層は河側、つまり匹見川の北側で尖滅している。層厚は最大で22cmを測り、局地的に河石や円礫を含んでいる。10層は、基盤層と考えられる河床礫であった。中には70cm大の河石が露頭する。

(渡辺友千代)



地内に所在する新横原遺跡



1. 発掘地点近影(南西から)



2. 層序状況(南から)

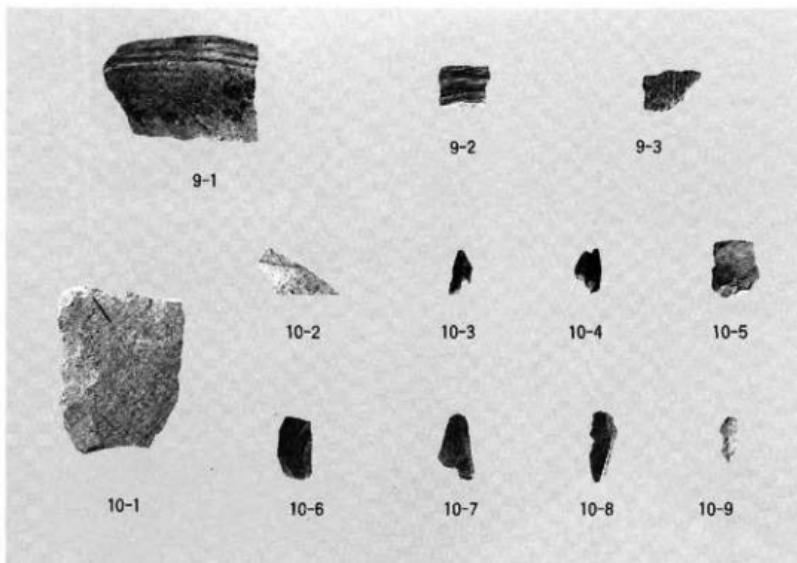
図版2



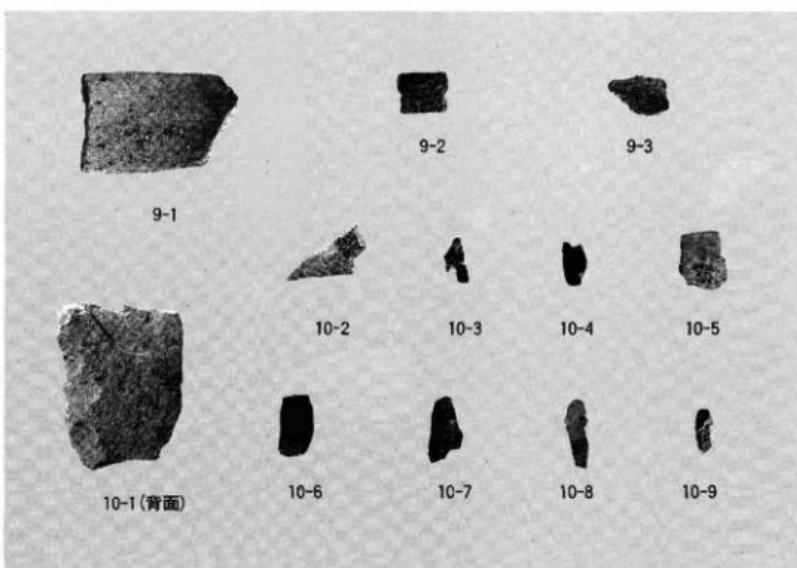
1. 西壁・北壁の層序状況

2. 南からみた
集石遺構(北から)





1. 実測遺物(背面)



2. 実測遺物(裏面)

図版4



1. 発掘地点遠影(南東から)



2. A区北壁



1. B区北壁



2. 発掘地点近影(東から)

図版 6



1. 完掘状況(北から)



2. 発掘地点遠影(北東から)

平成7年3月10日 印刷
平成7年3月30日 発行

匹見町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ

発 行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町1260
印 刷 有限会社 谷 口 印 刷
島根県松江市母衣町89
